

九頭竜川改修春江築堤記念碑

河合村高屋から大石村定広の間は堤防がなく、しかも木部堤防の前面の村々（内陸くぼ地）は、木部堤防に遮られて何日も水が引かないという恒常的な水害地帯であった。そのため、洪水のたびに人々の生活は困窮した。大石村大牧（現坂井市春江町大牧）の豪農であつた坪田仁兵衛は、これを救おうと築堤運動を始めたが、県名が【本保県、足羽県、敦賀県、石川県、福井県】とたびたび変わり、県庁所在地が移転し、行政機構もその都度変更した。そのため、何度も再提出を強いられ、一向に前進しない状態が続いた。そこで、とりあえず石塚から正善まで堤防を築き内陸くぼ地への浸水を防ごうとした。いわゆる第二輪中構想である。しかし、抜本的な解決にならないという強い反対があり、実現しなかつた。仁兵衛は県議会議員となり、県会で築堤の必要性を訴えるが、反対も多く、議会に向かう途中暴漢に襲われ負傷したこともある。明治二十九（1896）年七月十日、仁兵衛は念願成就目前にして病魔に倒れ、五十八歳で亡くなつた。

仁兵衛の死後、明治三十（1897）年十一月には、課題となつていていた堤防の用地問題が解決。仁兵衛氏の意思を引き継いだ五十嵐千代三郎（河合村二日市）が高屋～高江、岡部直景（大石村井向）が安沢～定広の工区担当者となり、明治三十一（1898）年三月から待望の築堤工事が着工された。明治三十二（1899）年一月末に春江堤防が完成。平均の高さわずか二尺三寸九分（約七十二センチ）であつたが、平均敷巾は五間四尺六寸（約十メートル五十センチ）と堂々たるものであつた。これは、築堤反対運動の一角であつた対岸の川西地区との高さに関する約束や九頭竜川河川改修を見越しての県の対応があつたためである。完成祝賀式は、同年七月九日（仁兵衛の命日の前日）石塚地係、三年後第一大石小学校石塚分教場となる空地で盛大に開催され、祝宴の余興として大相撲一行の興行が行われた。明治二十九（1896）年には、国会で河川法が可決された。これにより、明治三十三（1900）年、九頭竜川国営改修工事が始まり、日露戦争のため工事は遅れたが、十一カ年の歳月を要して、明治四十四（1911）年二月十一日に完了した。

改修工事では、左岸は下志比村（現永平寺町）、右岸は鳴鹿村（現坂井市丸岡町鳴鹿）から三国の海に至るまで堤防が築かれた。工事は上流から同時に進められ、明治四十（1907）年頃には春江に達し、これにより春江堤防は本堤に埋没してその姿を消した。

春江堤防水害予防組合議会は、明治四（1871）年以来二十七年に及ぶ築堤運動と巨額な地元負担によつて完成した春江堤防が忘れ去られるのは残念であるとし、顛末を記した記念碑を建てることに決定した。そして、大正二（1913）年十月、明治四十一（1908）年改称して石塚尋常小学校となつた校庭の一部（ここ）に九頭竜川改修春江築堤記念碑が建てられた。春江堤防水害予防組合は、翌年から毎年七月九日に築堤記念祭をこの碑の前を会場にして行うようになった。

組合が主催する記念祭とは別に、大牧神社と石塚神社でも記念の神事を行つてきた。春江堤防に続く九頭竜川国営改修の完了によつて、洪水の惨禍から救われ、くらしにゆとりの出来た農民たちは、自らの手で「堤防まつり」というまつりを創造したのである。

大正から昭和にかけて、近隣に見られないほど大勢の人出でにぎわつたこの祭りも太平洋戦争の始まつた頃から神事だけとなり、戦後、踊りは復活したが、現在は神事も行われなくなつてしまつた。また、

水害予防組合の事務を引き継いだ春江町は、

毎年築堤記念祭を実施してきたが、その春江町もなくなり、築堤記念祭を知る人も少なくなつた。

わが村の存亡をかけ幾世代にもわたつて、流血の攻防を繰り返した「木部堤防」も、今はもうあとかたもない。かつて慢性的な不作地帯であつたこの地域を有数の稻作地帯に発展させた先人たちの功績も農業の占める地位の低下とともに、次第に忘れ去られようとしている。

毛利権一著『堤防—暴れ川、九頭竜川を制した男たち』を参考にし、引用させてもらいました。

大石地区まちづくり協議会では、この偉業が後世に末永く語り継がれていくことを願つて、説明板を制作、設置することにしました。

